

5-4					
主 題		自立支援介護による帰宅願望の変容			
副 題		ショートステイ利用者の心理的安定につながった事例			
キーワード 1	ショートステイ	キーワード 2	帰宅願望	研究(実践)期間	3ヶ月

法人名	社福) 東京武尊会	事業所名	東京令和館中野
発表者(職種)	喬 清華(介護職員)		
共同研究(実践)者	森田由紀(介護係長)		

電 話	03-3386-8038	FAX	03-3386-8037
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	2020年4月に中野区に開設。私たちは、専門的な理論に基づく自立支援介護を実践することにより、地域の高齢者が失われた自立性を取り戻し、いつまでも住み慣れた場所で安心して暮らしていけるよう支援します。お元気な方はより元気に、重度の方も自立性が回復できるように、一貫したケアを提供します。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

東京令和館中野では、自立支援介護の考え方を取り入れたショートステイサービスを提供している。

対象者 A 様(81 歳・男性・要介護 1)は、脳梗塞や糖尿病等の既往があり、認知症Ⅲa を呈していた。妻の逝去後に認知症状が進行し、ショートステイ利用開始当初は強い帰宅願望がみられた。何度も玄関から外へ出ようとする行動があり、環境への不安や混乱がうかがえた。また、水分摂取量は 1,000ml 程度と少なく、排泄失敗やトイレ以外での放尿、意識の混濁や不適切な言動もみられていた。ショートステイを安心してご利用できる環境づくりが課題となっていた。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

自立支援介護の視点を取り入れた継続的なショートステイ支援を実施することで、ご利用者の安心感を高め、帰宅願望の軽減と心理的安定につながるかを検証することを目的とした。ご本人の生活歴を尊重した関わりや他者との交流機会の提供、生活リズムの安定を図ること、施設生活への信頼感が形成され、帰宅願望が改善すると仮説を立てた。

《3. 具体的な取り組みの内容》

ご利用者の人生歴に着目し、これまで従事していた雑誌編集の仕事や家族との思い出などについて傾聴を行った。

また、他ご利用者との交流機会として会話や将棋を取り入れたほか、体操やレクリエーション、近隣公園への散歩などの活動参加を継続的に支援した。

さらに、自立支援介護の基本である水分摂取の促進や生活リズムの安定を図り、安心して過ごせる環境づくりを行った。

《4. 取り組みの結果》

利用開始から 3 か月後、水分摂取量は約 1,000ml から 1,809ml へ増加した。排泄面では失敗が大幅に減少し、自らトイレを探して行動する場面がみられるようになった。また、意識の混濁や不適切な言動はほとんどみられなくなり、生活リズムも安定した。帰宅願望については、当初みられていた「帰りたい」「外へ出たい」といった訴えが大幅に減少し、最終的には「今日は泊まる」と自然に受け入れられるようになった。表情も穏やかになり、他利用者との交流を楽しむ姿がみられるなど、心理的安定が得られた。

《5. 考察、まとめ》

帰宅願望は単なる問題行動ではなく、不安や孤独感、環境への不信感などから生じる心理的な SOS であると考えられる。

本事例では、自立支援介護による生活リズムの安定、水分摂取量の改善、他者との交流機会の増加、そして職員による継続的な傾聴と寄り添いが相乗的に作用したことで、施設生活への安心感と信頼感が形成された。

その結果、帰宅願望の軽減だけでなく、排泄や認知症症状の改善、生活全体の安定にもつながったと考えられる。

ショートステイにおいても、自立支援介護を基盤とした個別ケアがご利用者の心理的安定に大きく寄与することが示唆された。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

『新版 介護基礎学—高齢者自立支援の理論と実践』（2017 年） 竹内孝仁

《8. 提案と発信》

帰宅願望への対応は、行動を制止することではなく、利用者の不安や孤独感の背景を理解し、安心できる環境を整えることが重要である。

ショートステイにおいても、自立支援介護の視点から水分・活動・交流・生活リズムを整えることで、ご利用者の安心感や心理的安定につながる可能性がある。本実践を通して、帰宅願望への新たな支援方法として施設内外へ発信していきたい。